



沖縄大学図書館

第43号

2006.11.1

館報 南十字星

発行：沖縄大学図書館

〒902-8521

沖縄県那覇市字国場555

TEL (098) 832-5577

FAX (098) 834-1127

(館報 南十字星)

## 新刊紹介

### 『沖縄県の百年』

(山川出版社 2005年 共著)



人文学部教授 金城正篤

本書は「県民百年史シリーズ」全47巻の1冊として上梓された。共著者は私のほかに上原兼善（岡山大学）・秋山勝（沖縄大学）・仲地哲夫（沖縄国際大学）・大城将保（沖縄戦研究者・作家）の4氏である。

「復帰」の年（1972）に、同じ出版社から県史シリーズとして出版された『沖縄県の歴史』（旧版、これも共著）の「近代」の部分を担当したいきさつもあって、今回の『沖縄県の百年』の執筆の依頼を受けた。本書は明治・大正・昭和三時代にまたがる近・現代100年を時代範囲とするもので、明治の「琉球処分」前後から沖縄戦を経て「復帰」前後までを叙述の対象としている。

沖縄の近・現代100年の歴史を振り返ってみると、他府県には見られないいくつかの特異な事象が指摘できる。それは実は前近代において独自の国家＝琉球王国を形成し、保持した歴史の中で育まれた要因によるところが大である。

第一に、日本の近代国家への統合のされ方がまるで違う。日本の国内統一措置としての廃藩置県がそれほど混乱なく実行されたのにくらべ、沖縄に対する廃藩置県が、いわゆる「琉球処分」という武力を伴う強制併合の形で実行されたこと、しかもそのことが対外（清国との）危機を招く誘因になったことに典型的に示されている。

第二、近代化の政策的遅れがある。沖縄県政がスタートしてほぼ20年も、王府以来の土地・地方・租税の諸制度が基本的に引き継がれ、いわゆる「旧慣温存」策がとられた。この「旧慣」の評価については、政府の意識的・政策的な「温存」措置であったのか、それともやむを得ざる「存続」策だったのか、「温存」か「存続」かで議論のある所であるが、まだ決着がつかないと言えない。

第三、「方言論争」の問題がある。「標準語論争」と置き換えてもよい。「国民的同化」を急ぐ沖縄県学務部が、「標準語励行」を標榜し、方言の使用を禁止しようとした無謀なやり方に対し、柳宗悦ら日本民芸協会の人たちが反対を唱えた。1940年（昭和15）のことである。この論争は当面、標準語使用と方言の問題をめぐる提起された議論であったが、ことからはもっと広く、かつ深く、沖縄の個性的文化の価値評価にかかわる問題であった。沖縄県の内部から「標準語」の強要が図られたところに事柄の深刻さがある。

第四、沖縄戦。「沖縄戦」という用語は一部の日本史事典では項目として立てられているものもあるが、歴史用語として日本の歴史学界で必ずしも一般に認知されているとは言えない。しかし、現地沖縄においては沖縄戦という用語は定着し市民権を得ていると見てよい。沖縄戦では非戦闘員である住民を最悪の形で巻き込む地上戦が展開された。「集団自決」か「集団死」か呼び方が問題とされているが、このほど「軍命による自決」の強要があったことを示す米公文書が発見された（『沖縄タイムス』2006年10月3日朝刊）。

第五、私は1972年（昭和47）の沖縄の施政権が米国から日本に返還されたことを復帰とは呼ばないことにしている。呼ぶとしてもカギカッコを付けることにしている。日本への復帰運動は沖縄県民の多くが「悲願」として運動を続けてきた。県民の「悲願」は少なくとも「基地抜き」の復帰であったし、「返還」後も基地はなくなるどころか、機能が強化され続けている。この稿を草している時点にも、米軍の数十台の車列が深夜国道58号線を通って、地对空誘導弾パトリオット（PAC3）の関連装備品が嘉手納基地に運ばれているのだ。

本書が、このような沖縄県の百年を振り返り、今もって難問として残されている歴史的課題を見据える手がかりにでもなれば、と願っている。

クレイトン・クリステンセン著、玉田俊平太(監)伊豆原弓(訳)

『イノベーションのジレンマ 技術革新が  
巨大企業を滅ぼすとき』

(翔泳社 2001年発行)



法経学部講師 崔 珉 寧

1998年の春、私がこの本を初めて手にしたのはこの時期であった。ちょうど大学院に進んで間もない修士課程1年の最初の学期であった。楠木健先生(現一橋大学大学院国際企業戦略研究科助教授)担当の経営学史特論という科目をとっており、最初に渡されたブックリストにマルコ・イアンシティの『テクノロジー・インテグレーション』と本書の2冊が記されていた。いずれも1997年または1998年と出版されて間もないことから日本語の翻訳本はなく、洋書のまま読まなければならなかった。英文の専門書2冊を読まなければならないというつらい作業が予想されていたのに対して、いずれも平易な文章で書かれ、さらに明快な論理が記述されていたことから、あまり苦勞せずにすらすら読み進めることができた。この2冊はともに優れた研究であったが、とりわけ本書は、経営学研究の道を踏み始めた時期の私に大きな希望を与えてくれた。この1冊の本を通じて、企業行動研究は非常に面白い作業であり、経営学は楽しい学問であることを強く思ったのである。経営学の学問を目指す人々とビジネス界で活躍を果たそうとしている人々に、最初の一步として是非この1冊の本をおすすめしたい。

前述の経営学史特論の講義では、上記の2冊のほか、野中郁次郎、藤本隆宏、アルフレッド・チャンドラー、エディス・ペンローズ、米倉誠一郎先生らの著者も課題として出された。これらの研究成果を読み終えた後、参加者みんなで研究者の分類作業を行ったことを覚えている。これまた楽しい作業の1つであった。研究成果のタイトルが最初から決まるタイプと決まらないタイプを分類する作業であった。野中郁次郎、藤本隆宏、エディス・ペンローズ、マルコ・イアンシティ教授らは前者に区分され、のこりのアルフレッド・チャンドラー、米倉誠一郎、そして本書の著者であるクリステンセン教授らは後者に区分された。私は、これまでの経験から、経営学とビジネスのビギナーであれば後者のタイプの研究を先に読むとよいだろうと考えている。まず経営学の面白さに触れることが大事であり、この面白さこそ長続きする秘訣であろうと思うからである。

ここで本書の中身を若干述べることにする。本書がとりあげている内容を一言で言えば、テクノロジーとイノベーション、そして企業パフォーマンスとの因果関係である。まず、出発点である問題意識が非常に興味深い。見事な成功をおさめたIBMといった世界トップレベルの巨大企業が、突然その地位を失いながら急速に衰退することがいくつかのハイテク産業で見られる。これらの企業は、最高の経営陣と経営手法のもとで、さらなる利益と成長を求め、積極的な投資と技術開発をおこなっている。顧客のニーズに常に細心の注意を払いながら、トップレベルの経営者と技術者は絶えず技術革新をおこなう。にもかかわらず突然と業界の首位の座を新規参入企業に渡さなければならないときがくる。これまでの経営学の世界で言われてきたことを忠実に再現したからこそ、衰退の道をたどるのである。

なぜこのようなことがおきるのか。この答えを提供しようとしているのが本書のねらいである。この答えとは、「持続的技術」と「破壊的技術」の存在であった。大きなシェアをもつトップ企業は、主要市場のメインの顧客が評価する性能指標にしたがって、既存製品の性能を向上させる努力をおこなう。これが持続的技術であり、巨大企業の行動である。しかし、時としては破壊的技術が現れる。この破壊的技術は、従来とはまったく異なる評価基準をもつ。また、短期的には既存の技術と競合できるような能力をもちえないが、長期的には主要市場のニーズを満足させるまで進歩していくのである。巨大企業は既存のシェアを維持するために持続的技術にとらわれ、この破壊的技術に対応しにくくなるのである。トップ企業であるからもつこのジレンマこそ、巨大企業が突然と衰退する理由であった。

本書には、緻密に分析されたハードディスク・ドライブ、掘削機、ミニミル、マイクロ・プロセッサといったいくつかの事例が取り上げられている。まずは、ハードディスク・ドライブ産業のジレンマに触れていただくことをおすすめする。

山村武彦 著

『自分は皆「自分だけは死なない」と思っている』

(宝島社 2005年発行)



人文学部助教授 宮本晋一

この時期になると、多くの台風や異常気象に関するニュースが報道されたり、新聞等ではお盆に伴う交通事故の件数などが載っている。また、個人的には思いがけない方からの喪中ハガキに、驚き悲しむこともある。

台風等の災害については、沖縄県の土砂災害を皮切りに各地でゲリラ豪雨による被害が続出して驚き心配した。その上、今年の台風は一度通り過ぎてから再び中国で猛威を振るい、台風7号では想定外の228人の死者を出し、約300万人が自宅を追われ、21万2000棟が倒壊。台風8号では、319人の死亡が確認された。

さらに、事故についても埼玉県ふじみ野市の市営プールで死亡した小学2年、戸丸瑛梨ちゃん(7才)の事件についても驚き悲しむことはあっても、皆一様に「自分は大丈夫」と思って翌日にはプールを利用しているものもいた。

このように突然自分に降りかかるかもしれない災害、事故・病気など、まったく心の準備ができていないといっても過言ではないだろう。

そこで、『人は皆「自分だけは死なない」と思っている』である。

仕事柄、高齢者の老後や死生観について考えることが多く、タイトルに惹かれて手に取る本は多いけれども、なんとも脅かされたような気分になる題名ではないか。副題は「防災オンチの日本人」とある。

この夏の話題作となった「日本沈没」に感動し危機管理に目覚めた私にとって、挑戦をされるようにして、読み進めた。著者は諦めと根拠のない楽観を捨てて、災害を減らす方法を様々な事例での人の心理状態を読み解きながら提案している。

これからも、大型の地震は起こるだろう。風水害、悲惨な事故や火災も、まったく起こらないとは言えない。「どうせ死んでしまう」といった諦め、「なんとなく大丈夫がする」といった楽観が、自分の命だけでなく、周りの助かったかもしれない命さえも巻き添えにしていくこともある。また不思議なことに「皆でいれば安心だ」などなど…、その心理には客観的合理性や、科学的根拠はない。災害が発生したとき、または危ないなと思ったら、まず安全なところへ避

難するという思考が停止しているのだ。

災害とは運良く生き残るのではない。災害で生き残る人には、理由があることを十分に理解することが必要不可欠であることはいうまでもない。

今年も9月1日は「防災の日」だった。この日は全国各地で「防災を考える」集まりが開かれたり、避難訓練が実施される。年に1度でも、お互いの防災意識を高め情報交換を勧めていこう、と続けているようだが、確かに「イメージ」のないことへの備え、というのは意外にできないものだ。言葉ではいくらでも「やらなくちゃ」といっていても、さて、具体的に行動に移す、ということがなかなかできない。義務教育ではできた避難訓練もそれ以外での場所では、参加率や積極性は格段に低下する。

よって、著書からの警告は、厳しく胸に突き刺さる。

「自分だけは大丈夫」「良い状況がずっと続くといい」「少々お待ち下さいといわれて待ち続けた」「あえて危険地域に行く人」「不安があるのに備えはしない人々」「目の前の災害を信じようとしなない人々」ああ、すべて私である。中途半端に避難袋を用意し、なんとなく備えた気になっている。避難所で便利だったと言われている品々をそろえて(購入して)満足している。でも、考えてみたら、そういったものは全て「生き残った」人々の声なのである。

帰宅避難(自宅から離れて被災した人のこと)のためのルートマップなども出版されているが、それもこれも、生き残ったらのハナシ。

防災心理、声なき声から学ぶことが先決。まずは、生き残るための正しい知識と、とっさに判断して、行動できる「心の防災袋」が必要なのだ、ということ。

最後にこの本は、恐怖感を煽るのではなく、災害を目の前にした人が、何を考え、どう行動するのかを説き、地震の危険性を無視し、根拠なき楽観に流れる日本人の災害観・人生観を変える1冊となるであろう。学生の諸君が現実の自分を見つめ、有効な時を過ごし、将来の生き方について再認識をするためにも、ぜひこの本をお薦めします。



伊坂 幸太郎 著

『砂 漠』

(実業之日本社 2005年発行)



法経学部法経学科2年次 浦 崎 織 江

去年の4月、私は沖縄大学に入学した。私は大学に行くことが、待ち遠しくて仕方なかった。大学は、講義や就職活動に追われて大変そうなイメージもあったし、クラスがないから友達ができるか心配だったりもした。しかし、サークルやゼミを通していろんな人と交流ができ、自分たち次第で自由に楽しめる雰囲気がとても新鮮だった。

勉強も遊びも両立できるか不安もあったが、今しかできない学生生活を満喫したいと思っていた。今回私が紹介する本も大学生主人公の物語であり、その日常を描いている。

岩手から上京してきた主人公の北村は、物事を俯瞰するタイプで、あまり大学生活に興味がない。みんなが新入生歓迎飲み会で盛り上がる中、一人つまらなさそうにしていた。そこでちょっと軽い感じの男鳥井と仲良くなる。鳥井が、東西南北の名前だからという理由でみんなを麻雀に誘う。北村を始め、一見ほのぼのとした雰囲気だが、実は超能力が使える南、無表情だが美人で男子学生の注目を集めている東堂さん、そして飲み会の席に突然入ってくるなり自己紹介をして、世界情勢について演説を始めてしまう変わった男西島など、個性的な面々が集まる。この出逢いによって、大学生活に無関心だった主人公も、徐々に変わり始めていき、様々な出来事や、ちょっとした事件に巻き込まれていく中で5人の友情が芽生えていく。日常にありそうな事件や、超能力などの非日常的なことも、違和感なく織り交ぜられた内容になっている。また、大学生のありのままの心情が良く描かれていて、共感できる部分や考えさせられる言葉が多くあった。

例えば、西島の「その気になれば、砂漠に雪

を降らすことだってできるんですよ」という言葉はすごく印象的だった。西島という男は、本当に不思議な人間である。「目の前で困っている人がいれば助けちゃえばいいんですよ」など、物事に対して真っ直ぐで、正々堂々と向き合っている。私達が、普段思っているもなかなか口に出せないことを平気で言ったり、実行したりする彼は、とても面白くて目が離せなかった。西島なら砂漠に雪を降らせるような奇跡を、起こせるかもしれないと思うほどの存在感があった。また、北村君の彼女鳩麦さんの「『自由演技って言われたけど、どうすればいいんだろう』と頭を掻きながら、悩みながら生きていくしかないんだと私は思う」という言葉も心に残っている。私たちは今、大学というオアシスにいて、それは「砂漠」のような社会に出るための準備期間でもある。砂漠に突然放り出されて、自由にやっていいよと言われても、実際どうしていいかわからないと思う。正解なんて誰も教えてくれないから、自分で悩んだり迷ったりしながら、進んで行くしかない。社会に出る前の不安や、自分自身の中の葛藤などが、すごくリアルに描かれていて共感できた。私はこの本を通して、改めて大学生活を見直す良い機会になった。大学の4年間で経験する、楽しいこと、苦しいこと、嬉しいこと、そして辛いことなど、たくさんあると思うが、どれもきっとこれから生きていく上で必要なものだと思う。その中で、少しずつ成長していけたらと思うし、いろんな人との出会いも大切にしていきたい。この本を読めば、そんな素敵な出会いをたくさんしたいと思うだろう。おすすめの一冊なので、ぜひ読んでほしい。

山本周五郎 著

『季節のない街』

(新潮文庫 昭和37年発行)



福祉文化学科2年 林 り さ

高校2年の時に、図書館である日たまたま太宰治の『きりぎりす』という本に出逢った。本の題名からして「きりぎりすの生態について書かれた本なのか」と手にとってみると、違った。小説だった。その当時、小説（フィクション）を毛嫌いしていたこともあり、そのまま本棚に戻そうとしたが、何故だか少し読んでみるか、という気になった。読んでみると、あまりにも面白くて、熱中して読んでいた自分に気付く。ある日偶然に出逢った太宰治の『きりぎりす』は、それまで小説をほとんど読まなかった私にとって運命的とも言える出逢いであった。

このとき私は自分を変えるきっかけとなる本に出逢ってしまったのだ。この本と出逢いを機に太宰治に夢中になり、全集なんかを一気に読み漁った。太宰は今も私の大好きな作家の一人だ。太宰との出逢いを機に、私はこれまで敬遠してきた小説も読むようになる。今までに色々な小説を読んできたが、特に好きな作家は太宰治、芥川龍之介、坂口安吾。この三作家の本は何度も読み返してしまう。

ところで、最近、新たに読み始めた作家の中でとても気になっているのが、山本周五郎である。黒澤明監督の「どですかでん」という映画の原作が、山本周五郎の『季節のない街』だと知り、これを恩師から薦められて読み始めたのだが、昭和37年の作品でありながら、奇しくも今の時代にもマッチしていると感じられるストーリーに背肯きながら読まずにいられなかった。この小説は都会の貧困層を生きる人々の物語を15作の短編として収録している。どの話をとっても実に考えさせられるものばかりである。今回はその中の一編『プールのある家』を紹介してみたい。

登場人物は犬小屋のような住居で寝起きし、衣食は他人から貰う父子。子どもは8歳位である。母親はいない。子どもは夜遅くになると小屋から抜け出し、繁華街へ残飯を貰いに行く。「ねえ」や「なあ」などと呼びかけ、お互い名前呼び合わないその父子はいつも仮想上の話ばかりをし、現実的なことは一切触れない。父が喋り、子ど

もはほとんど黙って父の話に頷くか、聞いているかの聞き役だ。そして今日もいつか建てて暮らすはずであろう自分たちの家について語りだす。場所は丘の上が良い、壁は大理石にしよう、洋館はスコットランド風にして台所は日本風にしようなどと、空想上の家は何度も建替え・改築などを繰り返しながらどんどん完成に向けて創られていく。空想の家はとてつもなく豪華なものだ。しかし現実の世界ではいつも僅かな残飯を食べ、寒い場所で生活をし、その日その日のギリギリな生活を生きている父子。それでも現実的な話しに一切触れない。

「ねえ」「なあ」などとお互い呼び合う異様にも思える親子関係。でもしっかりと心を通わせ、大きな愛が溢れていることに気付いた時、悄然としてしまった。乞食同様の生活（本文にある言葉をそのまま使用）をしながらも、この父子は会話や行動は決してネガティブなものでなく、むしろ明るいくらいだ。また、滲めとも感じさせない。しかし逆にその明るさが何かを問いかける。

この本を読んで思い出されるのが、憲法第25条【すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。】この小説に出てくる人々の極限ともいえる暮らしぶり、でもそこには人間の本当の姿が描かれているのではないかと感じられずにはいられない。「生きる」って何なのか。文明が人間の本当にあるべき姿を奪ってしまったのだろうか。貧困問題というのはいつの時代にも問われる問題だが、ここ数年では特に格差社会という言葉が大きく取りざたされ、リストラや倒産を始め、ワーキングプア（働いても豊かになれない、働く貧困層）の増加、地域格差などは広がるばかりだと懸念されている。何が正しくて、何が間違いなのか、その境界さえ不明確になりつつある今日。社会構造の根本的な矛盾や是正に私たちは今、何をすべきなのだろうか。

山本周五郎にはこれからも読み漁っていききたい作家の一人だ。

佐藤 初女 著

『おむすびの祈り』

(集英社 2005年発行)



図書館主査 名 幸 妙 子

佐藤初女さんを知ったのは、ある雑誌（これを書く為に調べたら、2004年8月発売の『ドマーニ』という女性誌だったことがわかった）に載っていた、田口ランディの記事で、初女さんの作るおむすびは手間暇かけ、丹精込めて作ったもので、食べる人々に感動を与える、というような内容だった。その当時すでに流行りつつあった、スローフード関連の記事だろうと思って読んで覚えている。

2回目に初女さんの名を耳にしたのは、映画「地球交響曲」（ドキュメンタリー映画、1番～5番）だった。他の有名な出演者、ジャック・マイヨールや、ダライ・ラマなどとは違い、初女さんは無名な出演者であった。上記の名前は知っているが初女さんの名を知るひとは今でも少数であろう。にもかかわらず、クローズアップされていたのは、初女さんだった。

この本は、初女さんが森のイスキアという、心を病んだ人々を向い入れる家を立ち上げるに至った経緯や、その中で、初女さんが作った食事を通して、人々が癒されていく様が綴られている。

地球交響曲の龍村監督曰く「食べるという営みは、本来生きていくうえで最も“聖なる営み”であるはずなのに、同時に誰でも毎日ごくあたり前に行っている全く“俗なる営み”でもある。その日常生活の奥に秘められている命への深い愛や叡智を、誰でもがわかる姿で示してください」その言葉通り、初女さんはお米ひとつ研ぐにしろ、

漬物を漬ける時にしろ、単なる食材ではなく、自分と全く変わらない命を持った存在である、とっておられる。その初女さんの姿を見て、食して、心を病んだ人々は癒されていくのだろう。当たり前すぎて忘れていたこと、そして一番難しい当たり前のこと。

初女さんにとって「食」というのは、人と人を繋ぐ架け橋であり、手段なのであろう。

日本各地、心を病む人々が訪れる場所は、数多くある。しかし、なぜ、人々は彼女の周りに集まってくるのだろうか？この問いに答える初女さんの言葉を見つけた。「奉仕のない人生には意味がない。奉仕には犠牲が伴う。犠牲の伴わない奉仕は真の奉仕ではない。（この牧師の説教を聞いて）私は、それまでも、お腹のすいている人がいれば食べさせ、着るものがない人がいれば服をあげ、ということはしていたのですが、それは自分が無理なくできる範囲のことでした。しかし、それではいけないんだ。ある一線を越えなければ本当の意味での奉仕ではないんだ。」この、人と向き合う姿勢が人々の心を打つのだろう。上っ面のボランティア精神を持つ私にとっては、心に突き刺さる言葉だった。

この本は、食を通して、命の大切さを伝えていくことを教えてくれた一冊である。時間がないことを言い訳に、サンエーで買ったきたお惣菜を食卓に並べることが多い私だが、先ずは明日の朝、心を込めて、一人娘におむすびを握ろうと思う。

新着図書案内(抄)

請求記号	書名	著者名	発行所
002.7	自分で調べる技術：市民のための調査入門	宮内 泰介	岩波書店
007.58	アンビエント・ファインダビリティ：ウェブ、検索、そしてコミュニケーションをめぐる旅	Morville Peter 浅野 紀予	オライリー・ジャパン
289.2	マオ：誰も知らなかった毛沢東	Chang Jung Halliday Jon 土屋 京子	講談社
292.09	写真で読む僕の見た「大日本帝国」	西牟田 靖	情報センター出版局
304	富の未来	Toffler Alvin Toffler Heidi 山岡 洋一	講談社
325.2	会社法入門	神田 秀樹	岩波書店
326.3	犯罪被害者の声が聞こえますか	東 大作	講談社
331    L57	ヤバい経済学：悪ガキ教授が世の裏側を探検する	Levitt Steven D. Dubner Stephen J 望月 衛	東洋経済新報社
333.8	世界と恋するおしごと：国際協力のトビラ	山本 敏晴	小学館
335.15	株式会社社に社会的責任はあるか	奥村 宏	岩波書店
336.55	ロジカル・ライティング：論理的にわかりやすく書くスキル	照屋 華子	東洋経済新報社
361.44	「みんなの意見」は案外正しい	Surowiecki James 小高 尚子	角川書店
366.0253	ニッケル・アンド・ダイムド：アメリカ下流社会の現実	Ehrenreich Barbara 曾田 和子	東洋経済新報社
369.04	福祉の人間学：開かれた自律をめざして	窪田 暁子 高城 和義	勁草書房
369.16	未知との遭遇：癒しとしての面接	奥川 幸子	三輪書店
375.893	小学校でなぜ英語？：学校英語教育を考える	大津 由紀雄 鳥飼 玖美子	岩波書店
378	LD・ADHD・高機能自閉症就学&学習支援	森 孝一	明治図書出版
491.371	Mind hacks：実験で知る脳と心のシステム	Stafford Tom Webb Matt 夏目 大	オライリー・ジャパン
498.021	医療崩壊：「立ち去り型サポーター」とは何か	小松 秀樹	朝日新聞社
498.519	食品の裏側：みんな大好きな食品添加物	安部 司	東洋経済新報社
514.09	道路の決着	猪瀬 直樹	小学館
675.3	価格競争なきものづくり	多喜 義彦	日経BP社
801.7	翻訳教室	柴田 元幸	新書館
913.6	ドリームバスター	宮部 みゆき	徳間書店
933.7	ハリー・ポッターと謎のプリンス	Rowling J. K 松岡 佑子	静山社
〈琉球弧関係〉			
R335    I76	沖縄に学ぶ成功の法則 伊敷流沖縄ビジネスの心	伊敷 豊	沖縄スタイル
R810    I88	沖縄の方言札：さまよえる沖縄の言葉をめぐる論考	井谷 泰彦	ポーターインク
R207    A65	沖縄現代史	新崎 盛暉	岩波書店
R498.6    O52	沖縄県ハンセン病証言集	沖縄県ハンセン病証言集編集総務局編	沖縄愛楽園自治会
R940    N33	異風な目から：折々の思いと言葉を綴って	中原 俊明	沖縄タイムス社

(この案内は、2006年4月～2006年10月に受け入れた新着図書の抄録である)

貸出トップ20

(2006年4月～2006年10月)

順位	請求番号	タイトル／著者名	貸出回数
1	049    Sh82	生協の白石さん / 白石昌則, 東京農工大学の学生の皆さん著	15
2	167    Ka82	イスラームの日常世界 / 片倉もとこ著	13
3	837.7    Ste    1	I can do it! : featuring Jim Henson's Sesame Street Muppets / by Sarah Albee ; illustrated by Larry DiFiori	12
4	837.7    Ste    0	Elmo says, Achool! / by Sarah Albee ; illustrated by Tom Brannon ; featuring Jim Henson's Sesame Street Muppets, 11	11
5	830.7    Su96	日本人はなぜ英語ができないか / 鈴木孝夫著	//
6	361.45    N67	外国人とのコミュニケーション / J.V.ネウストプニー著	//
7	689    Ma26	現代観光総論 / 前田勇編著	10
8	361.42    W46	国際感覚ってなんだろう / 渡部淳著	//
9	810.7    Ta57	日本語能力試験「1級」対策問題集：文法・文字・語彙の総仕上げ自習30回 / 高澤幸子著	//
10	933.7    R78    6下	ハリー・ポッターと謎のプリンス / J.K.ローリング作；松岡佑子訳	//
11	933    B77    上	ダ・ヴィンチ・コード / ダン・ブラウン著；越前敏弥訳	//
12	933    B77    下	ダ・ヴィンチ・コード / ダン・ブラウン著；越前敏弥訳	//
13	336.42    N18    2007	大事なことだけ総まとめ一般常識 / 就職情報研究会編	9
14	829.1    Sh72	語学王韓国語 / 塩田今日子著	//
15	829.1    H46	メモ式朝鮮語早わかり / 早川嘉春著	//
16	837.7    Ste    1	Baker, baker, cookie maker / by Linda Hayward ; illustrated by Tom Brannon	//
17	837.7    Ste    1	Twinkle, twinkle, little bug / by Katharine Ross ; illustrated by Tom Brannon ; featuring Jim Henson's Sesame Street Muppets	//
18	726.1    O26    2	ダーリンは外国人 / 小栗左多里著	//
19	480.4    H46    2	またまたへんないきもの / 早川いくを著；寺西晃絵	//
20	336.42    Sh82    2005	就職試験集中マスター一般常識 / 白石弘幸編	8



# 図書館事情

- 2006年 4月1日 図書館報第42号発行  
 4日 入学式・新入生図書館オリエンテーション  
 20日 私立大学図書館協会西地区部会九州地区協議会（田里修館長参加）  
 21日 九州地区大学図書館協議会総会（田里修館長参加）  
 18日 新入生図書館ツアー開始 5月18日迄  
 5月16日 第1回図書館運営委員会  
     議題：1. 2006年度予算について  
           2. 図書館編集委員長の選出  
           3. 学生用図書購入について  
 6月7日 県大学図書館協議会第1回企画委員会  
 7月19日 那覇高等学校インターンシップ生3名受け入れ  
     28日 県大学図書館協議会総会・講演会（沖縄国際大学）  
 8月1日 第2回図書館運営委員会  
     8日 蔵書点検のため12日迄閉館  
 8月25日 平成18年度私立大学図書館九州地区研究会（田里館長、主査 城間尚樹参加）  
     30日 日本私立大学協会平成18年度大学図書館司書主務者研修会（城間尚樹参加）9月1日迄  
 9月6日 学術情報学研究所 目録システム（図書コース）講習会（儀間真太参加）9月20日迄  
 10月25日 県大学図書館協議会第2回企画委員会  
 11月1日 図書館「館報」43号発行  
 11月7日 南風原高等学校インターンシップ生3名受け入れ 11月9日迄  
 11月18日 推薦入学試験  
     19日           〃  
 2007年 1月20日 センター入試  
     21日           〃  
 2月10日 一般入学試験A日程  
     11日           〃  
 3月4日 一般入学試験B日程  
     10日 卒業式  
     18日 一般入学試験C日程

## 2006年度 図書館運営委員

所 属	氏 名
図 書 館 長	田里 修（図書館運営委員長）
法 経 学 部	武市 周作    小林 甫
人 文 学 部	西 泉（図書館報編集委員長）    松本 晶子
図 書 館	屋良 るみ子    城間 尚樹